

真田・北金目遺跡群からみた塚越古墳

—考古学における民俗方位研究の一試論—

東海大学文明研究所・白川美冬

キーワード：弥生後期～古墳前期・塚越古墳・真田・北金目遺跡群・民俗方位

1. 民俗方位をめぐる

(1) 自然方位と民俗方位の二者

私たちが日常的に用いる東西南北の方位概念は、北極を基点に四分割された「自然方位」である。この絶対的な方位概念と対をなす相対的な方位が本稿で扱う「民俗方位」である。

民俗方位とは人間が自然地形や自然環境を認知し、そこに地域固有の精神世界を投影することで形成される文化の方位である。より具体的にいえば、山と海、川上と川下、日の出と日の入などの一対の要素を基礎とし、そこに優と劣、聖と俗、明と暗、生と死などの地域固有の価値体系を付与した方位観を指す。

民俗方位の研究は文化人類学や社会人類学、民俗学、歴史地理学などの分野領域を中心に進められてきた。具体的には民俗方位から対象とする社会や文化を分析し、社会における空間の意味付けを明らかにする方位観の研究と、民俗方位の種類やその形成プロセス、人類における方位の意義などを探究する通文化的な研究がある(吉田 1977)。報告者は前者の検討にくわえ、後者を列島規模で捉えるための基礎作業を行ってきた(白川 2022、2024a・b)。

(2) 考古学から民俗方位を考える

ホモ・サピエンスである我々には同等の空間認識能力が備わっている。本来、考古資料から自然方位が敷衍する以前の社会を対象に、その方位観を検討しようとする場合、その基軸となる諸要素を精査したうえで、方位に投影された抽象的な世界認識を考える必要がある。

そこで世界各地の民俗方位研究を概観し、その基軸として抽出された諸要素をまとめたものが表1である。民俗方位の基準となる自然条件は、山と海、川上と川下など三次元における垂直方向の上下すなわち「傾斜」、出没位置を意識した「太陽」、季節ごとの風向きの変化に即した「風位」の三者に大別される。民俗方位の基準となる地理的条件は各地域の論理の中で選択されており、これらの要素が相互補完的に用いられることも珍しくはない。考古資料から民俗方位を検討するには、対象とする遺跡を取り巻く「傾斜」「太陽」「風位」との関係を整理する必要がある。

そこでまずは真田・北金目遺跡群と塚越古墳を取り巻く地理的条件を整理したうえで、何を基準に方位が規定されていたのかを考えてみたい。

表1 民俗方位の基軸となる諸要素

地域	基軸	例	参考文献
古代エジプト 上エジプト	川	ナイル川の上流⇄下流	倉田2009
古代エジプト 下エジプト	太陽	日の出⇄日の入	ジョン1971
モンゴル 遊牧民	太陽	日の出⇄日の入	海2004
台湾本島 セデック族	山・海	内陸(daya)⇄海(hunat)	落合2015
台湾本島 アミ族	太陽	日の出⇄日の入	常見1968
台湾蘭嶼 ヤミ族	山・海 風位	山岳(tirala)⇄外洋(tilaod) —	三富1993 三富1996
北タイ カレン族	太陽 川 地形	日の出⇄日の入 上流⇄下流 高⇄低	吉松1989
インドネシア バリ島バリ人	山・海・川 太陽	山(kaja)⇄海・川下(kelod) 日の出⇄日の入	倉田2009 大林1985
ハルマヘラ島 ガレラ族	陸・海	内陸⇄海	吉田1977
ルソン島 ポントック族	陸・海	内陸⇄外洋	合田1976
北海道 アイヌ	太陽 川	日の出⇄日の入 川上⇄川下	浜口2021 切替2012
沖縄 波照間島	岬 風位	高那崎⇄毛崎 季節風夏⇄冬	鈴木1978

2. 真田・北金目遺跡の地理的条件

平塚市の真田・北金目遺跡群には、弥生時代後期から古墳時代中期の大規模な集落が存在した。東海大学湘南校舎の王子ノ台遺跡を西端とし、北金目塚越遺跡を東端とする。弥生後期前半に集落が形成されると、後期後半に最盛期を迎え、古墳中期まで西相模の中心集落としてあり続けた。

本遺跡群は秦野市方面から東に張り出す北金目台地の先端に位置する(図1)。台地頂部の塚越古墳から北に約0.7km地点には大根川、南に約0.8kmの地点には金目川が東流する。金目川は川底が高く比較的流れの速い荒川としても知られ、近世に治水事業が行われるまで、10年に1度の頻度で洪水が発生していた(早田2009)。

周囲を見渡すと、西には富士山や弘法山、北西には大山を中心とした丹沢山地、南東には高麗山がある(図2)。とくに大山は言わずと知れた霊峰であり、冬になると丹沢凧あるいは大山凧と呼ばれる北風が吹き下ろす方向でもある(図3)。大山は雨降山¹⁾という別名を持ち、山頂付近に雲がかかると程なくして相模平野一帯に雨が降る。そのため農業を行う人々にとっては雨乞い信仰の対象でもある。また相模湾で漁業を行う人々にとっては、海上で自身の位置を把握するさいの山アテの対象であり、豊漁を祈願する山としても信仰されている(田中1978)。こうした信仰に加えて祖霊の魂が鎮留するという伝承も残る(田中1980)。

そこで真田・北金目遺跡群から富士山・弘法山・大山・高麗山の見える範囲を国土地理院の基盤地図情報から可視化したものが図4～7である²⁾。大山は本遺跡群のほぼ全域から視認できるが、富士山と弘法山は北金目台地の中央部に入る谷の部分と、東台地の縁辺部から見えないことがわかる。また高麗山は台地上においても視認可能な場所が限られる。

また太陽の出没位置を概念化したものが図8である。夏至と冬至は年間の太陽の運行範囲の北限と南限を指し、春分・秋分はその中間に当たる。平塚市はダイヤモンド富士が有名な地域であり、これは春分・秋分付近の太陽が富士山に沈むさいに生じる現象として知られる。図9は昨年秋、東海大学の王子ノ台遺跡から撮影したダイヤモンド富士である³⁾。本遺跡群でも富士山が視認可能な場所では、この印象的な情景をみることができたことだろう。ただし北金目台地で8年生活を営んできた筆者の経験に照らしてみると、その日の天候や霞み具合によって富士山は見え隠れするため、年2回必ず観測できたかはわからない。

3. 真田・北金目遺跡群の民俗方位

本遺跡群の人々は何を民俗方位の基準に選択したのだろうか。本報告では弥生時代から古墳時代前期の方形周溝墓と竪穴建物の長軸方位を対象に、この地域の方位傾向を整理したうえで、塚越古墳の方位について考えてみたい。なお方位の算出については、報告書記載のものも含め、再度計測を行い、長軸方向が明瞭ではないものについては扱わないこととした。



図1 真田・北金目遺跡群の範囲



図2 富士山・弘法山・大山・高麗山



図3 東海大学からみた大山

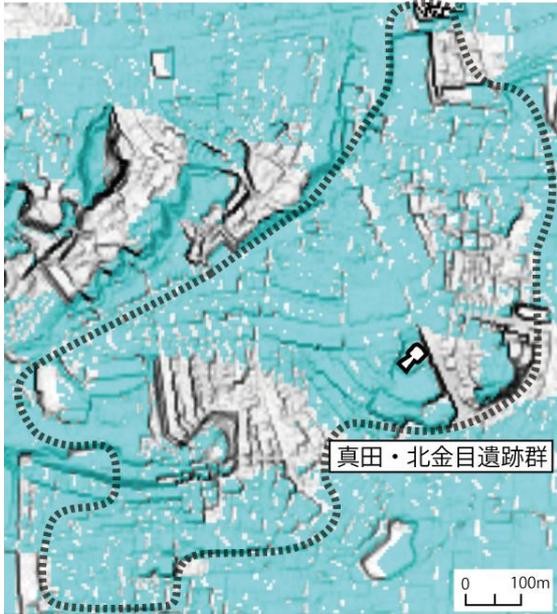


図4 富士山の見える範囲

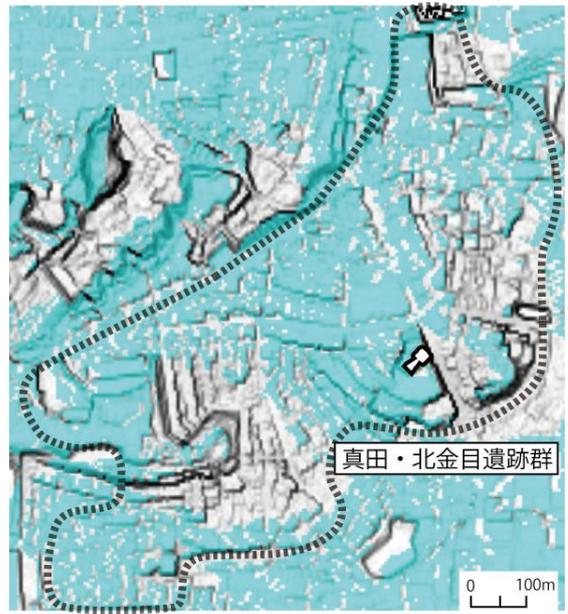


図5 弘法山の見える範囲

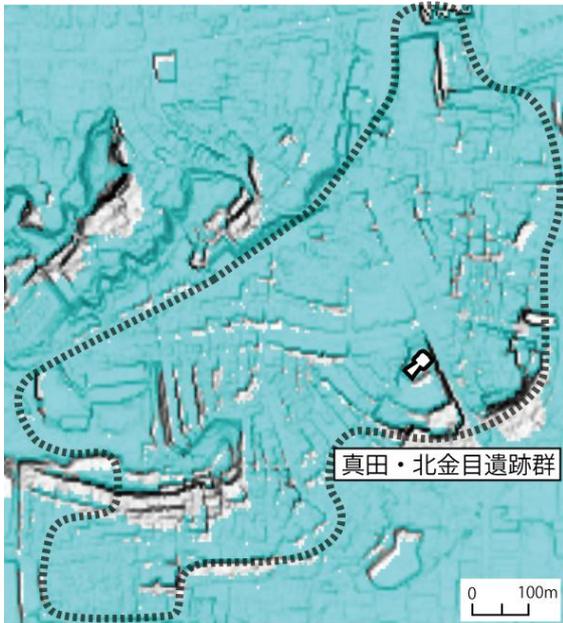


図6 大山の見える範囲

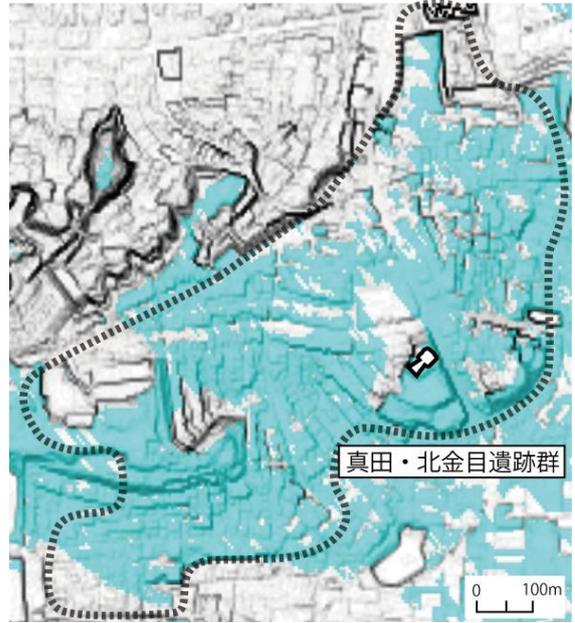


図7 高麗山の見える範囲

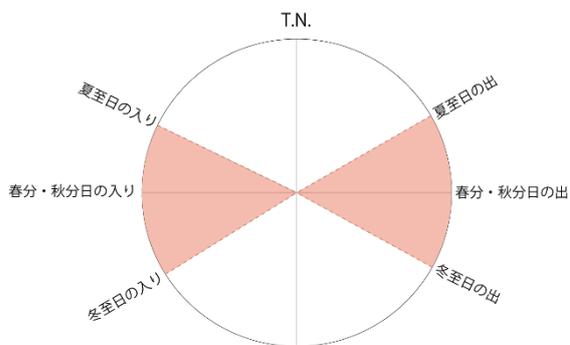


図8 年間の太陽の出没位置



図9 ダイヤモンド富士

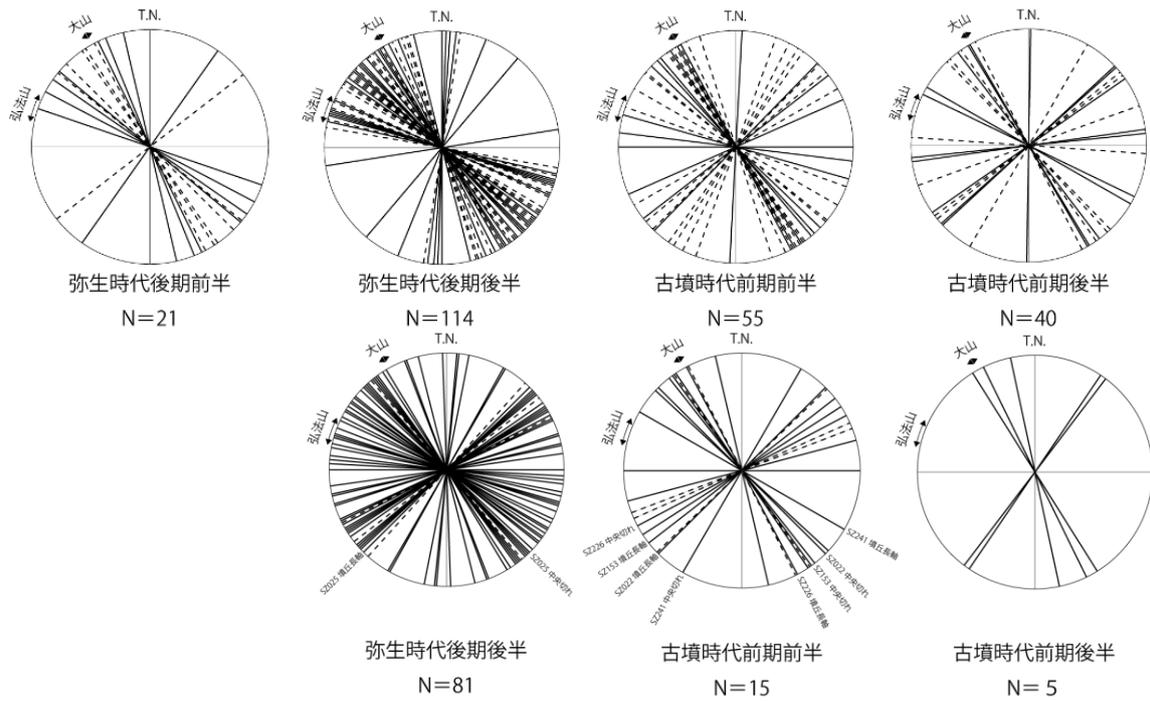


図 10 時期別の方位の傾向

(1) 時期別の動向

竪穴建物と方形周溝墓の長軸を時期別に整理したものが図 10 である。時期区分や分類方法については、シンポジウム資料に掲載した付論をご参照願いたい。まず竪穴建物をみると、弥生時代後期のあいだは北西—南東が多く、古墳時代前期前半以降、北東—南西も増えはじめる。方形周溝墓では弥生時代後期後半以降、北西—南東と北東—南西が一定の割合で確認され、中央切れの事例は開口部が南側を向く。北西—南東と北東—南西は直交する関係にあり、前者は主方位、後者は副方位と整理できる。これらを周辺景観と照らし合わせた場合、主方位は弘法山から大山にかけての 30° 範囲に偏ることがわかる。

(2) 地形と長軸の関係

遺構の方位に人間の積極的な意志の介在をみる場合、地形との関係を整理する必要がある。ただし真田・北金目遺跡群は範囲が広く、墓域と居住域も複雑な様相を呈している。そこで遺構同士の空間的な断絶と方形周溝墓や竪穴建物の方位を基準に、A~J までの地区分けを行い、四山が視認可能な地点に任意の基準点(図中の●)を設定したうえで、方形周溝墓と竪穴建物の長軸方向を整理し、地形の傾斜との関係を点検した(図 11・

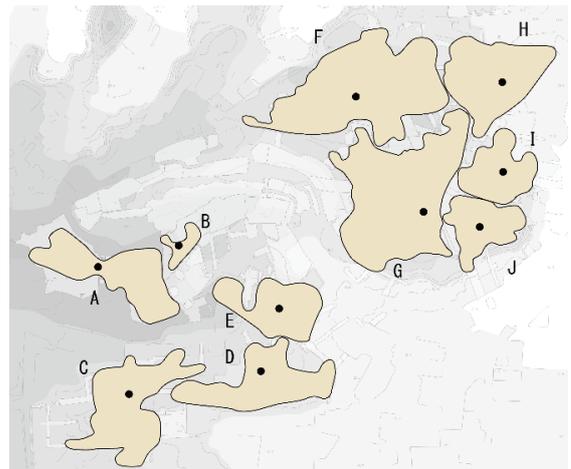


図 11 地区と基準点

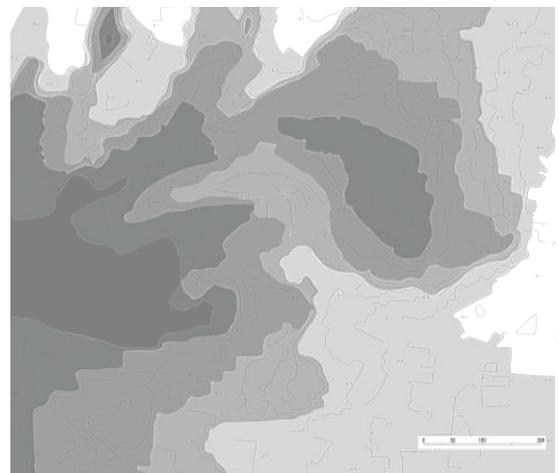


図 12 本遺跡群の地形 (5m 区分)

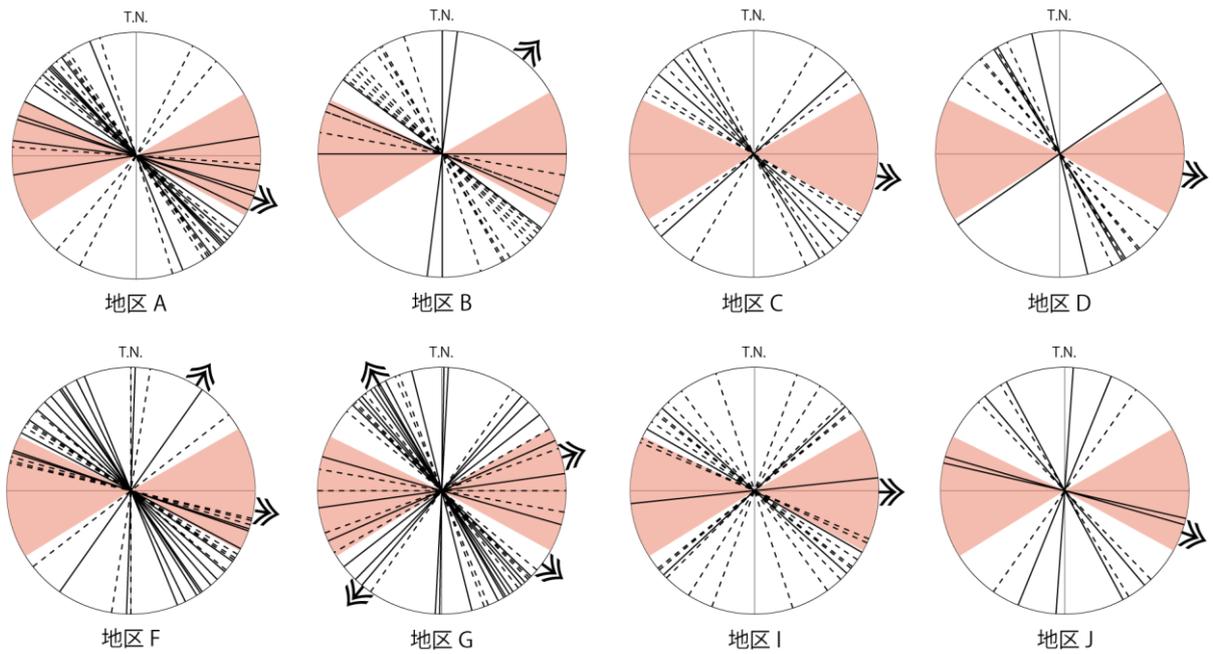


図 13 地区別 地形の傾斜と建物の方位

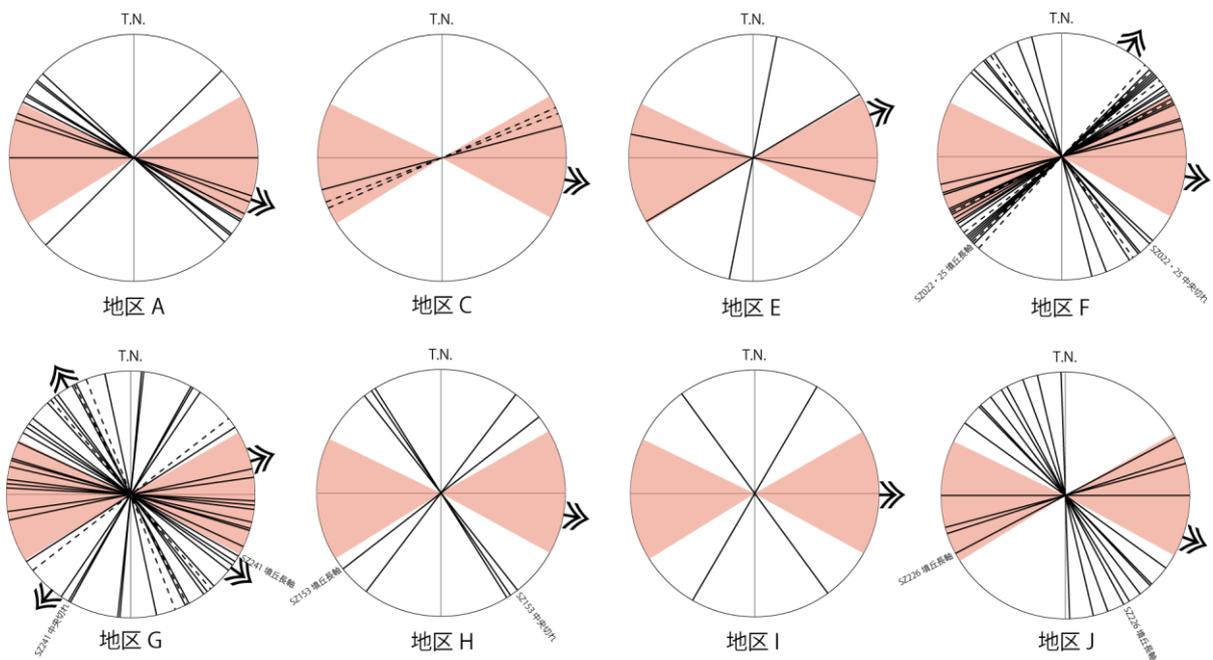


図 14 地区別 地形の傾斜と方形周溝墓の方位

12)。なお、各基準点の緯度経度や、そこからみた山や太陽の出没位置については、表 2・3 をご参照願いたい。

各地区の地形と長軸方向の関係を点検したものが図 13・14 である。本遺跡群は地形が入り組んでいるため、尾根筋のように地性線を表記することは難しい。そこで地形の傾斜の低い方向を>>で示している。遺構の方位と地形の傾斜(>>)が平行する場合、地形に沿った配置が行われた可能性があり、直交する場合、地形に短軸を沿わせた可能性がある。

竪穴建物の方位を概観すると、大多数の竪穴建物と地性線が平行するものは A・G 地区、直交するものは B・F 地区がある。地形に沿わない C・D・I 地区をみると北西—南東に長軸を持つ建物が多く、直交する北東—南西がそれにつぐ。同様に方形周溝墓の方位を概観すると、

大多数の方形周溝墓と地性線が平行するものは、A・F・G・J 地区がある。地形に沿わない C・H・I 地区に注目した場合、墓においても北西—南東あるいは北東—南西に長軸に方位が偏る。

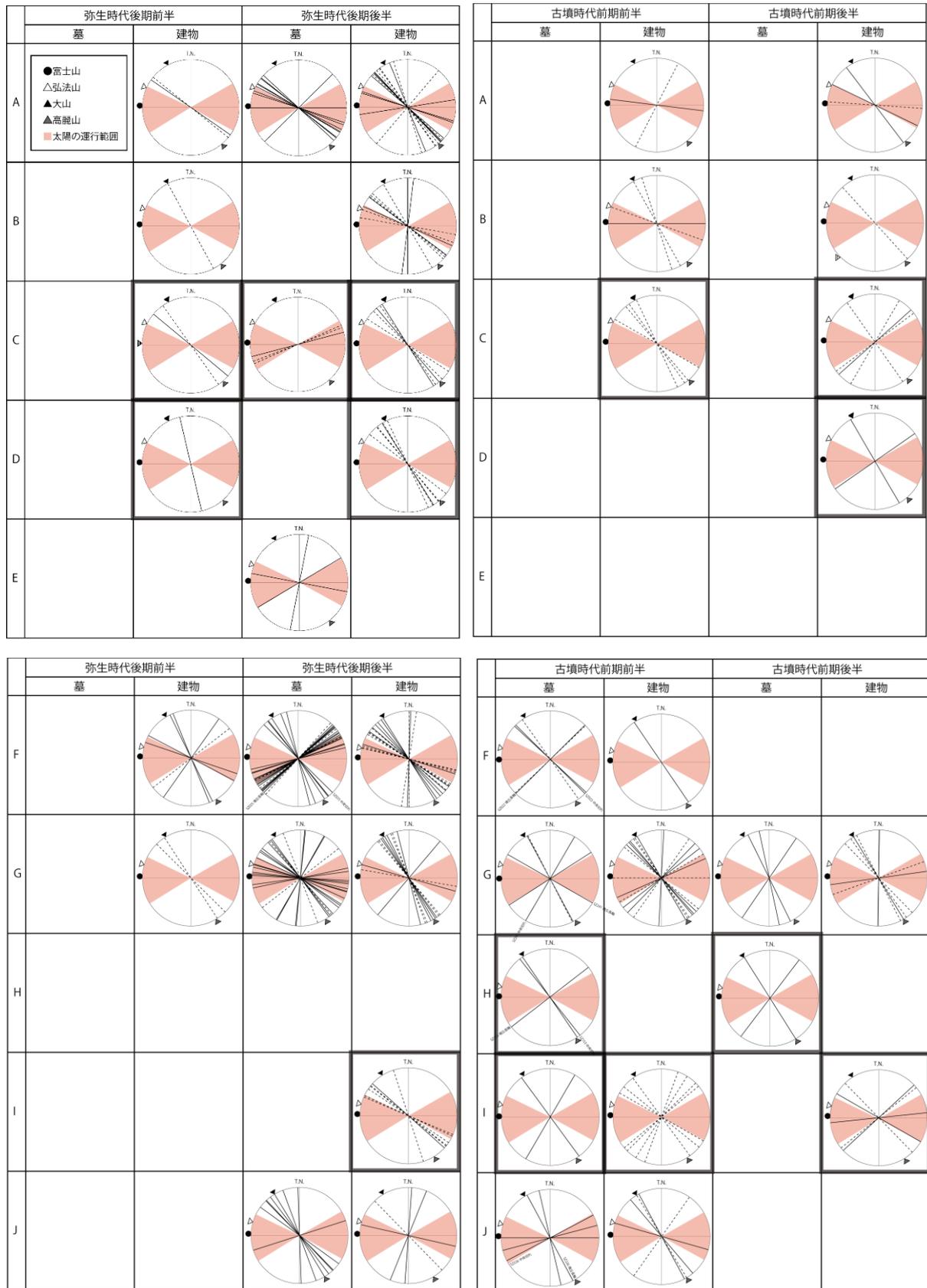


図 15 地区別の方位の変遷

地形に沿わない事例においても、主方位と副方位が選択されており、遺構の種類を問わずほとんどの地区が北西—南東あるいは北東—南西に長軸が偏ることを考慮すると、地形よりも優先すべき共通の方位観が存在したものと考えられる。

(3) 地区別の変遷

地区別の方位変遷を図示したものが図 15 である。黒枠で囲っている箇所は地形とは関係なく方位が選択された地点である。その変遷をみていくと、弥生時代後期前半には地点を問わず竪穴建物の長軸は北西—南東に偏る。後期後半には A・B・C・D、F・G・I 地区で北西—南東を向く竪穴建物が多く、方形周溝墓では A・C・E・F・J 地区で主方位と副方位の関係が認められるようになる。なお C と F で南北を向く事例も出現するが、これは富士山に直交する一群だと思われる。

古墳時代前期前半には A 地区を除く竪穴建物が北西—南東ないし北東—南西を向き、方形周溝墓も同様に二分される。この主方位と副方位の関係は前期後半まで継続する。

地区別の変遷をみるかぎり、ほとんどの地点で北西—南東が意識されており、大山から弘法山までの範囲が方位の基準として機能した可能性が高い。なお、高麗山と大山は対角線上の関係にあるが、可視領域が大山や弘法山に比べて狭く、低山であることを考慮すると方位の指標であったとは考えにくい。

(4) 竪穴建物内の空間利用

北西に対する意識は、竪穴建物の内部における空間利用においても認められる。建物の奥壁に炉が置かれ、その対面に建物入口があったと仮定し、入口からみた炉の方向を点検したものが図 16 である。

弥生時代後期前半から古墳前期前半まで、炉は北西側に置かれることが多く、北東側がそれに次ぐ。また建物長軸と炉の位置関係をみると、竪穴建物の軸線が北西—南東を向くものの多くは炉が北西側に置かれることもわかった。

炉の対面側に入口が置かれたという仮説が正しければ、冬季の大山方向から吹き降ろす大

表 1 地区別の山の方向

西台地						
グループ	緯度	経度	富士山	弘法山	大山	高麗山
A	35:21:57.43N	139:16:41.66E	269.51°	292.39°	332.90°	140.89°
B	35:21:58.71N	139:16:47.45E	269.45°	290.52°	332.00°	142.18°
C	35:21:49.80N	139:16:43.85E	269.76°	296.32°	333.24°	139.86°
D	35:21:51.40N	139:16:53.30E	269.71°	293.53°	331.85°	141.97°
E	35:21:55.00N	139:16:54.50E	269.58°	291.37°	331.37°	142.85°
東台地						
グループ	緯度	経度	富士山	弘法山	大山	高麗山
F	35:22:07.71N	139:17:00.20E	269.14°	283.51°	329.44°	146.15°
G	35:22:08.38N	139:17:11.82E	269.37°	286.54°	329.44°	146.03°
H	35:22:08.77N	139:17:09.14E	269.11°	282.04°	328.16°	148.10°
I	35:22:03.22N	139:17:10.49E	269.30°	284.79°	328.53°	147.50°
J	35:21:59.79N	139:17:09.16E	269.42°	286.69°	329.02°	146.66°

表 2 地区別の太陽の出没位置

弥生時代後期前半 (A.D.1)								
グループ	春分 日の出	春分 日の入	夏至 日の出	夏至 日の入	秋分 日の出	秋分 日の入	冬至 日の出	冬至 日の入
A	89.714	267.946	60.129	296.698	89.471	267.716	119.174	238.235
B	89.717	267.928	60.125	296.838	89.474	267.702	119.177	238.236
C	89.863	267.930	60.127	296.560	89.468	267.707	119.182	238.236
D	89.855	267.941	60.124	296.700	89.617	267.826	119.176	238.237
F	89.712	267.799	60.129	296.696	89.466	267.699	119.182	238.397
G	89.716	267.796	60.126	296.696	89.473	267.571	119.184	238.399
古墳時代前期前半 (A.D.280)								
グループ	春分 日の出	春分 日の入	夏至 日の出	夏至 日の入	秋分 日の出	秋分 日の入	冬至 日の出	冬至 日の入
A	90.002	267.642	60.172	296.654	89.623	267.671	119.129	238.280
B	90.003	267.646	60.173	296.792	89.627	267.672	119.132	238.283
C	90.147	267.774	60.172	296.516	89.774	267.677	119.134	238.285
F	90.002	267.640	60.168	296.657	89.624	267.541	119.134	238.442
G	90.002	267.647	60.170	296.663	89.631	267.548	119.129	238.444
H	90.001	267.642	60.172	296.656	89.625	267.543	119.113	238.475
I	90.002	267.642	60.177	296.656	89.623	267.669	119.133	238.282
J	90.001	267.640	60.177	296.656	89.630	267.668	119.131	238.294
弥生時代後期後半 (A.D.100)								
グループ	春分 日の出	春分 日の入	夏至 日の出	夏至 日の入	秋分 日の出	秋分 日の入	冬至 日の出	冬至 日の入
A	89.717	267.945	60.146	296.686	89.459	267.724	119.149	238.266
B	89.716	267.937	60.150	296.833	89.460	267.713	119.163	238.264
C	89.718	267.934	60.151	296.545	89.462	267.840	119.165	238.259
D	89.859	267.938	60.143	296.688	89.611	267.844	119.166	238.263
E	89.717	267.943	60.153	296.820	89.462	267.844	119.169	238.260
F	89.723	267.810	60.147	296.684	89.460	267.712	119.165	238.418
G	89.717	267.810	60.149	296.686	89.462	267.600	119.167	238.413
I	89.712	267.812	60.146	296.686	89.462	267.719	119.167	238.258
J	89.719	267.938	60.146	296.686	89.464	267.718	119.159	238.271
古墳時代前期後半 (A.D.330)								
グループ	春分 日の出	春分 日の入	夏至 日の出	夏至 日の入	秋分 日の出	秋分 日の入	冬至 日の出	冬至 日の入
A	90.060	267.718	60.184	296.653	89.566	267.611	119.129	238.291
B	90.064	267.593	60.187	296.790	89.570	267.614	119.134	238.292
C	90.210	267.719	60.184	296.517	89.567	267.740	119.131	238.294
D	90.209	267.720	60.185	296.652	89.720	267.736	119.133	238.293
G	90.063	267.589	60.179	296.655	89.564	267.613	119.129	238.446
H	90.070	267.596	60.188	296.650	89.561	267.608	119.130	238.450
I	90.063	267.589	60.183	296.655	89.564	267.613	119.131	238.291
古墳時代中期 (A.D.430)								
グループ	春分 日の出	春分 日の入	夏至 日の出	夏至 日の入	秋分 日の出	秋分 日の入	冬至 日の出	冬至 日の入
C	89.640	268.020	60.197	296.503	89.502	267.801	119.119	238.305

山風に背を向ける構図となる。竪穴建物で生活を営む以上、快適な空間の確保は最重要課題であり、北西からの風が戸口から入らないことを意識された可能性は十分にある。

(5) 方形周溝墓の主体部方位

大山から弘法山への意識は、方形周溝墓の中心主体部の方位においてより顕著となる。主体部の方位と墳丘上における中心主体部の配置関係を示したものが図 17 である。中心主体部が検出されたのは弥生時代後期後半の段階に限定される。中心主体部は北西—南東に偏り、墳丘に対する主体部の配置のあり方は平行あるいは直交する。

主体部が検出された方形周溝墓の場所を●で表現したものが図 18 である。主体部が検出された方形周溝墓は A・F・G・H 地区にあり、東台地と西台地では距離があるため、相互を直接視認し合うことは難しい。また次の墓を造るまで、主体部を開けて放置し続けるか、墳丘上に何らかの遺構表示を行わないかぎり、埋められてしまった主体部の方位を知ることは不可能となる。そのため共通の目標を定めたいうで、墓が造られたことは確実視される。

したがって本遺跡群では大山から弘法山にかけての範囲を基準とした方位観が存在し、それが弥生時代後期前半から古墳時代前期前半まで存在していた可能性が高いとの結論に至った。

4. 真田・北金目遺跡群から塚越古墳を考える

ここまで方形周溝墓と竪穴建物を基準に遺跡群の方位観を論じてきた。そこで以上の動向を踏まえたうで、古墳時代前期後半に造られた塚越古墳の方位とその意義を考え、本稿のまとめとしたい。

塚越古墳は東台地の頂部に築造された全長 56.11m ほどの前方後方墳である(平塚市教育委員会 2012)。発掘調査の結果、主体部は墳丘主軸に平行する粘土床の木棺直葬で、水銀朱の散布状態から北東側に頭を向けたことがわかっている。主体部の副葬品は管玉 6 点、鉄製工具 1 点と水銀朱が確認されている。管玉はいずれも関東地方周辺で製作されたもので、水銀朱は古墳時代になって東海地方西部からもたらされた新たな葬送祭祀の方法として知られる(北條 2002、大賀 2012)。

墳丘部をめぐる周溝も確認されているが、なぜか前

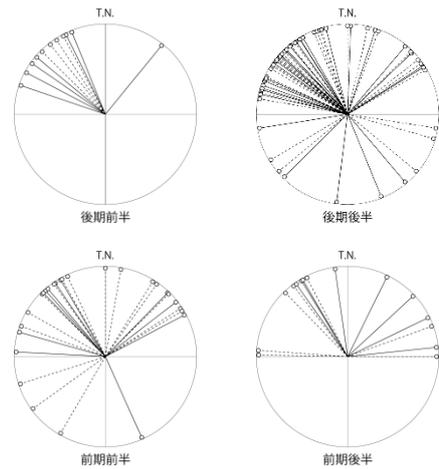


図 16 炉の方位

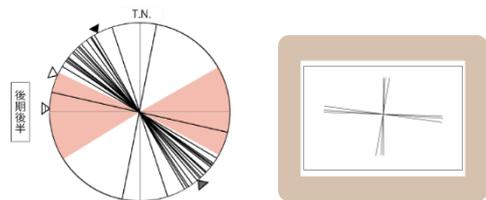


図 17 弥生時代後期後半の主体部

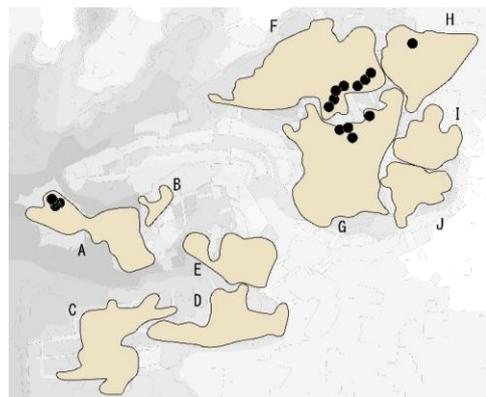


図 18 主体部が検出された場所

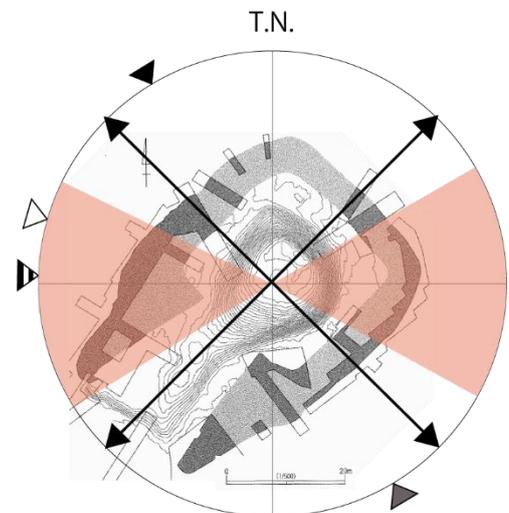


図 19 塚越古墳の方位

方部側は閉じられておらず中央切れの方形周溝墓の約束事を継承するかのような古相の様相を呈する。加えて前期前半以降の大型方形周溝墓はいずれもその墳丘規模が30m前後となるが、塚越古墳の後方部の規模(27.25×26.73m)と近似値を示す点は興味深い。前期前半以降の規格が採用されたのだろうか。

塚越古墳の築造された場所は古墳時代前期前半に住居址から墓域への転換が行われた場所である。塚越古墳に隣接する前期前半の方形周溝墓 SZ241 の下からは、前期前半の竪穴建物が確認されており、塚越古墳の下にも竪穴建物群が眠っているものと推測される。

なお塚越古墳の周溝内からは小銅環1点と土師器類が発見されているが、この銅環が周溝内埋葬に伴うものなのか、存在したであろう竪穴建物に伴うものなのかは不明である。また前期前半までこの地点は、大型建物が集中する場所であり、それらを解体した上に塚越古墳が営まれた事実は注意される。

問題となる塚越古墳の後方部はTN-44.8°-Eを向く。塚越古墳と周辺景観の関係を図示したものが図19であるが、墳丘主軸は大山・弘法山・富士山・高麗山や太陽の出没位置とは一致せず、大山・弘法山方向に直交する方位をとる(図20)。隣接する方形周溝墓SZ241はもちろんのこと、前期前半から前期後半の大型方形周溝墓は北東-南西を向くという共通点があり、塚越古墳にはこうした伝統的な地域側の方位観が採用されたと結論づけられる。



図20 塚越古墳からみた大山

5. 「脱・北枕の思想」

従来、古墳時代の埋葬方位研究は政治関係を把握する一手段として進められてきた。そのため弥生時代との断絶性すなわち前方後円(方)墳の被葬者が北枕で埋葬されたか否かが重視され、弥生時代の伝統を継承する方形周溝墓の埋葬方位が議論の遡上に上がることはほとんどなかった(白川 2024b)。

仮にこの政治的な枠組みに塚越古墳を落とし込んだ場合、大枠では北枕の思想の受容すなわち倭王権への参入だと解釈されかねず、弥生時代以降の地域固有の伝統が継承されたとする本稿の結論とは真逆の評価が下されてしまう懸念を拭えない。

万葉集の一節に、「相模峯の小峯見そぐし忘れ来る妹が名呼びて吾をねし泣くな」(万葉集・第十四)という大山を歌った歌がある。これは普段見ていた大山を見ないようにするのと同じように、忘れようとしていた彼女の名をつい呼んでしまった、という別れの歌であり、大山が故郷の原風景を象徴する、忘れることのできない山であったことを物語っている。

地域固有の自然地形や自然環境を基準とする方位観すなわち民俗方位が弥生時代から古墳時代に存在したことが確実視される以上、他地域の人々にとっての「相模峯」を探し出すことが人間の空間認知を捉えるうえで重要であり、方位研究の今後の指針となるだろう。

謝辞

本稿の執筆にあたっては、以下の方々に大変お世話になりました。特に記して御礼申し上げます。

柏木善治・白石哲也・田尾誠敏・立花実・中嶋由紀子・古屋紀之・西川修一・北條芳隆

註

1) その語源について『新編相模國風土記稿』には「頂上は常に雲霧深く、ややもすれば大いに雲起り、忽ち雨を降らす。但し此の雨は山中のみにして他に及ばず。故に土人私雨と称す。雨降山の名は是に因るか」と指摘されている。

また「祝り」すなわち葬送が転訛したという説もある(上田 1993)。

2) 国土地理院発行の5 mメッシュの基盤地図情報を基にカシミール3Dにて可視領域を作成した。分析時に使用した緯度経度と標高は次の通りとなる。富士山 35:21:38:91N、138:43:39:41E、標高 3776m。弘法山 35:22:29:65N、139:15:01:34E、標高 233m。大山 35:26:26:09N、139:13:52:89E、標高 1240m、高麗山 35:19:22:72N、139:19:15:43E、標高 168m。

3) 北條芳隆氏よりご提供いただいた。なお撮影日は2024年9月17日である。

4) 風位が竪穴建物の戸口に影響を及ぼすことを論じた研究としては駒木野智寛の論考がある(駒木野 2016)。

引用文献

上田篤 1993『海辺の聖地—日本人と信仰空間』

大賀克彦 2012「塚越古墳出土玉類の評価」『塚越古墳 平成19・21年度塚越古墳保存目的調査報告』29-32頁

大林太良 1985『シンガ・マンガラジャの構造』青土社

落合いずみ 2015「傾斜を軸とするセデック語パラソ方言の民俗方位」『神戸市外国語大学外国学研究』第92巻、神戸市外国語大学外国学研究所、25-47頁

海日汗 2004『ゲルの方位についての研究』早稲田大学大学院、理工学研究科

切替英雄 2012「アイヌの地理的認識と上(かみ)と下(しも)」『環太平洋の言語』第14号、北海道大学大学院文学研究科、35-56頁

倉田勇 2009「『民俗方位』の一考察」『天理大学学报』第24巻第2号、68-49頁

合田濤 1976「ボントック・イゴロット族の方位観覚書」『社会人類学年報』2、東京都立大学・首都大学東京社会人類学会、79-104頁

駒木野智寛 2016「縄文時代中期後半の岩手県域における竪穴式住居出入口の方位決定要因について」『季刊地理学』第67巻第4号、東北地理学会、221-238頁

白川美冬 2022「景観史的観点からみた前方後方墳」『東海史学』第56号、東海大学史学会、19-36頁

白川美冬 2024a「埋葬方位研究の今とこれから」『考古学研究』第70巻第4号、考古学研究会、62-75頁

白川美冬 2024b「朝日遺跡埋葬方位考」『研究紀要』3、あいち朝日遺跡ミュージアム、1-20頁

鈴木正崇 1978「南西諸島に於ける方位観の研究」『人文地理』第30巻第6号、人文地理学会、61-74頁

ジョン, A. W. 1971「エジプト」著山室・田中共訳『哲学以前』社会思想社、38-75頁

田中宣一 1980「相模大山の茶湯寺参りについて」『成城文藝』第91号、成城大学文芸学部、21-41頁

田中宣一 1978「明治初期における大山講の分布」『成城文藝』第83号、成城大学文芸学部、125-137頁

常見純一 1968「台湾・アミ族の住居と方位観」『住まいの原型II』、鹿島出版、157-175頁

浜口稔 2021「アイヌの死生観をめぐる小論」『明治大学教養論集』第554号、明治大学教養論集刊行会、1-22頁

三富正隆 1993「台湾蘭嶼ヤミ(Yami)族における空間認識と世界観の変容」『地理学評論』第66巻第8号、日本地理学会、439-459頁。

三富正隆 1996「台湾蘭嶼ヤミ族社会の民俗方位と地名」『法政大学地理学会』第24巻、法政大学地理学会、21-35頁

吉田集而 1977「ハルマヘラ島における民俗方位の構造」『国立民俗学博物館研究報告』第2巻第3号、10-18頁

吉松久美子 1989「南北のない世界」『地理』第34巻第12号、古今書院、89-95頁

早田旅人 2009「近世中規模河川における治水秩序とその変容」『自然と文化』平塚市博物館研究報告第32号、1-24頁

平塚市教育委員会 2012「総括」『塚越古墳 平成19・21年度塚越古墳保存目的調査報告』33-37頁

北條芳隆 2002「水銀朱の使用と祭祀」『墳丘墓から古墳へ』海老名市教育委員会、63-71頁

図表出典

図1・2・4・5・6・7カシミール3Dにて作成。図10・11・12・18平塚市教育委員会2013付属の地形図データを一部改変して使用。図3・20筆者撮影、図8・9・13・14・15・16・17筆者作成、図9北條氏提供、図19平塚市教育委員会2012を改変し使用。表1～3カシミール3D、Google Earth、ステラナビゲーター12にて筆者作成。